

リハビリテーション学専攻4期生の思い出

伊万里松浦病院 リハビリテーション科 作業療法士 平 野 佳奈子

私が西九州大学院に入学したのは、作業療法士免許取得後3年目のことでした。理由としては、1年目のときからお世話になっている上城先生がいってしまったことと、そのときに勤めていた職場の先輩が大学院に進んでしまったことで、大学院に対して興味と憧れがあったためだと思います。また、作業療法士としてどう対象者と向き合っていけばいいのか、大変悩んでいる時期であり、その悩みを解決したい、解決する方法を知りたいという思いも理由のひとつでした。

ただ研究については、学部生時代に勉強していたはずではありましたが、恥ずかしながら全く身についておらず、何からはじめてよいかもわからない状態でした。研究計画の段階から論文作成の最後の最後まで、指導教員の上城先生に手取り足取り教えて頂き、本当に頭が上がりません。分からないことばかりで、つらく感じることも多かったですが、入学して本当によかったと今でも思うことは、人とのつながりを作るきっかけを多く持てたことでした。

データ収集では、いくつかの施設に協力をいただき、そこでお世話になった作業療法士をはじめとした施設職員の方々の熱い思いや様々な取り組みを教えてくださいました。自らの技術や考え、思いの足りなさを改めて実感させられる一方で、熱い思いに影響を受け、自分ももっと様々なことを実践したいという思いに駆られました。また、対象者のご家族の思いを聞く機会をいただき、研究テーマに対する思いがより一層深まるきっかけとなりました。お酒を飲みながら熱いお話を聞かせてもらったことも良い思い出です。

また、大学院での授業は、働きながら通っていたこともあり、学部生時代に受けていた授業とはおもしろさが全く違いました。学部生時代は、授業で習っていることもイメージがぼんやりとしていたのですが、臨床の現場での悩みなどとリンクし、さらに発展していくところに興奮をおぼえました。リハビリテーションコースだけでなく、その他のコースの学生とのディスカッションは、とても新鮮であり、私の視野をさらに広げてくれるものでした。リハビリテーションコースの方には、研究のことだけでなく、臨床現場での悩みの相談に乗っていただくなど、本当に助けられました。

修士課程の2年間は、私にとって非常に大変なものでしたが、それ以上に得るものが多く、先生方や同級生、協力者の方にも本当に恵まれ、とても充実したものでした。大学院に入学したきっかけである、“臨床場面での悩みの解決”は、卒業後も現在進行形で続き、さらに深く広いものとなってしまいました。しかし、卒業後も上城先生や在学中に繋がることのできた方々に悩みを相談できるなどし、以前に比べると”悩み”を楽しめるようになっていると思います。

これからも、ご指導して頂いたこと・経験したことを胸に、作業療法士として対象者の方々に還元していけるよう、日々精進していきたいと思っています。